



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.269
2026.2.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

故郷茨城県の文化遺産を護り続けた人びと

ひたちなか市史跡虎塚古墳等の調査と保存

鴨志田 篤二

第7回 ◆ 馬渡埴輪製作遺跡の調査と全容の解明(5) ◆

馬渡埴輪製作遺跡の5次調査は、昭和42年8月に計画される。既に当初計画したA・B・C地区の調査により、埴輪窯跡を検出するとともに製作遺跡として付随すると考えていた住居址・工房址・粘土採掘坑等も、各地区から遺構の一部を検出していた。5次調査はさらなる全容の解明のため、A地区の台地北西部の奥に調査区を拡張して遺構の確認を実施した重要な調査となった。

今まで、馬渡埴輪製作遺跡の発見や確認、そして調査や発掘調査と先頭に立ち牽引してきた大塚は、6月から明治大学在外研究員として、米国経由で英国(大英博物館)へ出発する運びとなっていた。そのため今まで大塚とともに調査に当たられた小林三郎が調査を指揮することとなる。

大塚は、馬渡遺跡調査では遺構・遺物が検出される都度、地域の研究者、取材記者に詳細な説明を行っている。A地区2次調査終了後には、地元の文化財関係者と地元新聞(いばらき 昭和41年9月9日)紙上で座談会を開催し、調査開始から3次調査に至る一部始終について、詳細な説明を行っている。

座談会は、調査がすべて終了していないにも関わらず、「ハニワかま跡発掘を終わって」と銘打って、大塚が調査結果の説明を行い、県立美術館学芸員川上博義、県文化財専門委員滝田宏が補足説明をしている。司会は茨城新聞社三蔵本社編集局長である。

大塚は、馬渡遺跡3次調査終了時点で、遺跡の重要性と今後の保存について企画したものと思う。大塚は座談会冒頭で、過去3回の調査結果をふまえ、今までの考古学史上未確認である窯跡・埴輪工房址・原料の粘土採掘跡の確認を語り、その重要性を地域に知らせたのである。そして、それは4次調査以後の、埴輪製作遺跡の指針としたものではなかった。

座談会は司会の3次調査までの成果説明から始まり、大塚が埴輪窯跡の遺跡分布状況を説明し、埴輪窯跡が破壊を受けず完全な状態で調査できたことや、市営住宅のため破壊される恐れのあるB地点を急ぎ調査し、窯跡と工房址を確認できたことなどを公表した。さらにA地点の状況を述べ、今までわが国の埴輪窯跡の調査例では見られない、大規模な遺跡であることを力説する。



川上はハニワ馬の発見からの経緯を説明し、滝田や県埋蔵文化財指導員の川崎純徳などと現地調査を行い、遺跡発見の埴輪馬がA地区3号窯出土であることが断定できたことなどの成果を語った。さらに滝田は、埴輪製作集団と古墳から出土する埴輪の検討の実態究明を論じ、古代史の実態に迫った。大塚はこうした質問に対し、馬渡埴輪製作遺跡の重要性と大化の改新以前の社会構造を知るうえで重要な手掛かりを得られると期待していると述べ、そして最後に全員で、今後の馬渡遺跡の保存について、国指定

として「ハニワ公園」として残したいと結ぶ。

さらに市報「かつた(第92号 昭和41年9月10日)」では、市内在住の県立石岡一高の川崎純徳による調査概報が、紙面一面に次のように掲載される。

大塚初重の調査結果として「馬渡ハニワ窯の発掘調査は、まだ未調査の部分があり、今後も発掘調査を続けたい」と前置きし、工房址(アトリ工)の学術調査は馬渡遺跡の例が全国最初の例であると説明し、遺跡の具体的成果は、あと何回かの調査と出土品の研究によって明らかになり、



馬渡遺跡はこのような意味で、専門の学者のみならず、市や県のひいては国の文化財であるといっても過言ではないと明言する。そして、この馬渡遺跡の保護と顕彰の道が一日も早く実現されるよう祈らざるを得ないとし、遠く古き時代の工業団地ともいふべき馬渡遺跡を、開発が急ピッチで進められる勝田市において有効に生かしてゆきたいものですと市民に呼びかけている。

A地区の昭和42年度の調査は、計画通り8月5日から始まった。大塚初重は、明治大学在外研究員として英国(大英博物館)へ出発したため、小林三郎が現地指揮を執る。この夏の調査は、前年の調査で確認した2号住居址下の粘土採掘坑群との関連を明らかにすることであった。

2号住居址は、粘土採掘坑が廃絶され、廃土などで埋め戻された上に営まれたもので、東北隅に竈を持つのであった。2号住居址下の粘土採掘坑は、そのまま北方へ連続して掘り込まれていた。深いところでは表土下2mに及ぶもので、下底面では埴輪の原料となる青白色粘土が、厚さ20cmほど水平に堆積していることを確認した。この粘土採掘坑は、昨年へと連続するものであった。

A地区の台地は、全面にわたって各種の遺構が掘り込まれており、初めて調査対象として接する調査員は、酷暑の中、真理の追求のため、奮闘を続ける。粘土採掘坑では土坑内の完全な形の土師器が埋まっていたのを発見する。土器は土坑内のものや、廃土・埋土の中から発見されるもの、溝の上面にみられるものなど、出土状況はまちまちである。A地区の地層は、表土層・赤褐色ローム層・灰褐色砂質土・小砂礫を含む灰褐色砂質土・青白色粘土の各層に分けられる。青白色の粘土層の厚さは50~60cmある個所も確認できた。粘土採掘坑は、深いところでは表土下2m以上のところも見受けられた。西側から確認された第2号住居址は、粘土・黒土・ローム層が混じった層の上に存在し、住居址本来の床面が把握しにくく、トレンチにより最下層まで掘り込んでみると粘土採掘坑が存在していた等、困難な作業の連続であった。

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

目次

■故郷茨城県の文化遺産を護り続けた人びと(第7回)	鴨志田篤二 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第261回)	吉田知世 …3
■考古学の履歴書 考古学とともに歩む(第25回)	山本暉久 …2	■考古学者の書棚「諏訪史 第一巻」刊行100年一次の100年へ	児玉利一 …4

考古学の履歴書

考古学とともに歩む(第25回)

山本 暉久

25. 神奈川県職員としての考古学 その9

弥生時代旧河道と近代民家跡の調査

池子遺跡群の調査で、弥生時代中期後葉・宮ノ台式期の旧河道が確認されたのは、1989(平成元)年5月30日のことであった。前回も触れたように、その発見はまさに偶然のことであった。No.1-A地点調査地区に南北に設定した試掘調査トレンチをコンボで掘削していたところ、その南端部から水を含む砂質土層中に多量の弥生時代の土器や木製遺物などが検出されたのである。発見当初はそれが旧河道の一部であるとは想像できなかったが、本格調査が進むにつれ、旧河道の存在が確実となったのである。私の発掘人生のなかで、もっとも感動する遺跡の一つとなった。

ただちに、本格調査を実施したい気持ちではあったけれど、当たり前だが、重層的に遺存する各時代の遺構・遺物を新しい時代順に調査をしなければならなかった。中近世面とその下面からは、奈良・平安時代の竪穴住居址・掘立柱建物址・溝状遺構・土坑などや古墳時代初頭の住居址や方形周溝墓などが見つかると、これらの調査にほぼ年度いっぱいかかり、弥生時代面の本格調査は、ようやく翌1990(平成2)年4月に入ってから開始された。調査結果について触れる前に、古墳時代初頭の方形周溝墓群の調査成果について簡単に触れておこう。調査区北側の山寄り際から検出された方形周溝墓群は、遺存状態は必ずしも良好ではなかったが、周溝中に供献された壺形土器はいずれも、底部穿孔されていた。周溝墓近くから出土していた底部破片がこの穿孔部に接合するものがあることがわかったのである。このことから、壺形土器を方形周溝墓に供献するに当たって、その場で底部を打ち欠いていたことがわかり、当時の埋葬儀礼の一端を知ることができたのは貴重な成果であった。本格調査が進行するにつれて、この旧河道は、調査区西端部に沿って北から南へと流れる流路と、その中央部から分岐して、蛇行しながら東西に横断するように流れる流路からなることが明らかとなった。この旧河道は、最終的には、No.1-A南・No.1-A東地点まで広がることとなる(全体図は前回の図参照)。

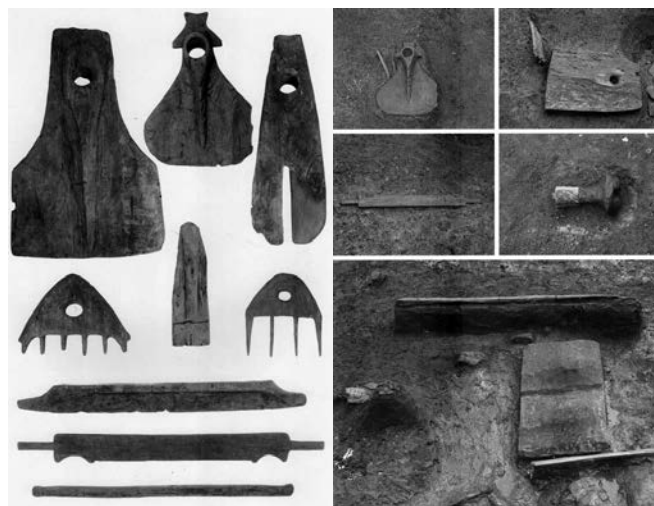
旧河道の本格調査にあたっては、土器・石器以外に、多量の木製遺物や、植物質の自然遺物などが水漬け状態で豊富に出土することが予想されたため、我々以外に自然科学者の協力が不可欠であると判断され、「池子遺跡群自然科学分析検討会」を新たに組織することとした。地形環境・地質、植物遺体、動物遺体、植物化石、木製品材質鑑定、テフラ、放射線炭素年代測定など、それぞれの分野を専門とする研究者に依頼して、不定期ではあるが、現地にて検討会を開催することとした。この自然科学者との調査の連携の成果は、調査報告書の『自然科学分析編』として最終的にまとめられている。

旧河道中に堆積する土壌からは、予想どおり多種多彩かつ多量の遺物が出土した(写真参照)。それら遺物の出土状態の詳細な記録を残すために、トータルステーションを用いて、各遺物の検出位置をドットで測量し、そのドット図をもとに、細部の形状等は手測で実測する手法で記録化を図った。そうした出土状態は、調査区グリッドに分けて、大きく土器と木製品・石器・骨角器などに分けて報告書に『付図』として掲載した。出土する土器は破片状態で出土するものが大半で、その後の整理作業で接合するものが多く、図面上に接合関係を示した。本格調査は多大な成果をあげ

て、1990(平成2)年12月末に終わることができたが、膨大な遺物整理と報告書作成作業に約6年間をかけることとなり、報告書は全4分冊と付図からなる大部のものとなった。私は、旧河道の調査に限らず全遺跡の遺構写真撮影を担当し、出土品整理のさいも遺物の撮影を担当し、朝から晩まで、現地のプレハブの整理事務所に設けた写場でストロボによる撮影を続けることになった。

出土した木製品の実測図は『木器集成図録』(1999.3)として報告書とともに刊行できた。また、旧河道から出土した木製品を中心とする遺物のうち、241点が神奈川県重要文化財として、2002(平成14)年2月に指定されている。

池子遺跡群は、戦前の1937(昭和12)年、日本帝国海軍の弾薬庫として接收され、丘陵部に多数のトンネルを穿ち、そこを弾薬庫として利用されてきたのであるが、弾薬庫造成に伴い排出された多量の土砂は、谷戸部に厚く盛土されていた。ここでは、No.7地点とした、「八坂谷戸」地区の盛土下の接收前の民家跡と河跡・道路が検出されたことについて触れておきたい。接收前の「公図」が残っており、その図面どおりに当時の民家跡などが検出された。とくに河跡は、切石を用いて護岸されており、河沿いに道路が付設していた。この河跡からは、接收前の近代の遺物が大量に出土した。「池子」などと書かれた徳利を含む各種陶磁器類、ビール瓶や薬瓶・化粧瓶などのガラス瓶、人名が彫られた硯や三角定規・コンパス・鉛筆などの文具類、ガラス製の石蹴りや陶製の人形、スプーン・フォーク・歯ブラシ・歯磨きチューブ・眼鏡・櫛・筭・古銭など実に多彩な近代遺物が出土し、接收前の生活の様相を知る貴重な成果をあげることができた。また墓地も見つかっており、接收時に改葬されてはいたが一部は残存していた。



▲池子遺跡群No.1-A地点旧河道内出土木製品 『池子遺跡群総集編』1999.3

略歴

1947年3月	新潟県東蒲原郡鹿瀬町(現・阿賀町)生
1965年4月	早稲田大学第一文学部史学科國史専修
1970年4月	早稲田大学大学院文学研究科修士課程
1973年4月	神奈川県教育庁社会教育部文化財保護課
1978年5月	日本考古学協会員
1985年4月	神奈川県立埋蔵文化財センター
1990年4月~1998年3月	早稲田大学第一文学部非常勤講師
1997年4月	財団法人かながわ考古学財団
2001年4月~2002年3月	昭和女子大学・同大学院非常勤講師
2001年11月	早稲田大学大学院文学研究科 博士(文学)
2002年4月	昭和女子大学大学院生活機構研究科教授
2003年10月	第4回宮坂英弑記念 尖石縄文文化賞受賞
2010年9月~2017年3月	駒澤大学大学院人文科学研究科非常勤講師
2017年3月	昭和女子大学定年退職・名誉教授 現在に至る

隔月連載です。次回は工業普通先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 261

三殿台遺跡 ～神奈川県横浜市

吉田 知世

三殿台遺跡は、横浜市磯子区岡村に所在する遺跡である。標高55mほどの台地上にある遺跡で、縄文・弥生・古墳時代に集落が営まれた。遺跡は明治31年に市内在住の医者によって発見され、翌年には「岡村貝塚」として学会に紹介された。

発掘調査は昭和36年夏に小学校の校地造成に先立って、和島誠一を中心として約10000㎡の範囲で行われた。国・県・市から合わせて100万円の予算が計上された、日本考古学史上例のない調査が行われた。

この調査は集落遺跡の全面的発掘、ブルドーザーやベルトコンベアといった重機を導入した大規模調査、市民の参加や協力といった特徴があった。それまで集落遺跡の調査は竪穴数件分しか掘らないことも多かったが集落の変遷を追うためにも全面発掘が選択された。学校の夏休みを利用しての調査だったため、短期間での調査であった。そのためブルドーザーで表土掘削を行い、廃土の運搬にはベルトコンベアを使用するという方法が採用された。そしてこの調査には研究者だけでなく多くの大学から学生が集い、中高生も参加した。調査参加者はのべ3000人にもなるという。現場のサポートには地元の町内会や婦人会があたったという。また調査成果として、縄文時代から古墳時代まで約270軒の竪穴住居跡を検出した。なかでも弥生時代の竪穴住居跡は170軒近くあり、農業が始まったころのムラや生活の様子がわかる遺跡として重要である。遺跡保存の声があがり、校舎増設は遺跡破壊を最小限にとどめる範囲で行い遺跡を保存する方針となった。昭和41年には国指定史跡となり、翌年には三殿台考古館が開館している。遺跡には、現在縄文時代・弥生時代・古墳時代それぞれ1棟ずつ3棟の竪穴住居が復元されている。保護棟では遺構を実際に見ることも可能である。

音楽デュオ「ゆず」の地元がこの辺りであることから、遺跡で撮影された写真がCDのブックレット写真にも使用されている。そのため今ではゆずのファンも集まる場所となっている。

私は小学校6年生の校外学習で初めてこの遺跡を訪れた。そもそも人生で初めて遺跡に行く経験ということもあり、とても楽しみだったことを覚えている。学校から遺跡までは歩いて行ったのだが、道中の記憶は坂が多く疲れたことだけである。遺跡に到着して遺跡の説明を聞く時間があつた。台地の上であり、海からそう遠くなく、川も近くに流れていたから多くの食物資源に恵まれていた、という話を聞いて、「昔の人も色んなもの食べたかったんだなあ。グルメだなあ。」という感想を抱いた記憶がある。当時の私にとって歴史は教科書の中でしか触れない、自分とは関係のないこととしか思っていなかった。しかし、坂を上って遺跡に到着し、見晴らしの良さや地形を感じることで、

一気に歴史を自分ごととして捉えられた瞬間であった。

復元住居を見ることも初めてで、時代によって違いがあることすら知らなかった私にとっては驚きの連続だった。平面形態が時代によって変化することや炉とかまどの時代による違いなど、考古学を勉強している人なら知っていることでも、無知な私にとっては全てが新鮮な情報だったのだ。

一番記憶に残っているのは、貝塚の剥ぎ取り標本をクラスみんなで見たことである。標本が大きな机に置かれ、クラス全員でその標本を囲んでいた。スタッフの方が一か所を指さして「そこにイノシシの歯もあるよ」とおっしゃった瞬間、その歯の近くにいた女子がキーンと悲鳴をあげた。私は彼女が悲鳴をあげた理由が分からなかった。大昔の人がイノシシを狩り、食料とし、食べられない部分を捨てたという一連の流れにロマンを感じることが出来ないのか、それに、イノシシの歯なんて凝視できる機会めったにないんだぞ、と思った。けれど今になって思う。彼女の反応は小学6年生としては普通ではないかと。

校外学習以降、歴史は好きであったが、その後三殿台遺跡への興味関心は薄れていた。大学時代、私は関西地方にある大学に進学したのだが、ある時三殿台遺跡の発掘調査報告書を読んだ。そしてその時にやっと「小学生の時に行ったあの遺跡はすごい遺跡だったのか」と初めて実感した。そして考古学の研究史上、重要な遺跡が地元にあるとも知らずに地元を離れて進学したことを後悔し、無知な自分を恥ずかしく思った。それと同時に「こんなに素晴らしい遺跡が地元にあるのか」と、地元を誇らしく思った。そのため就職の際は地元に戻ることにした。三殿台遺跡は私にとって考古学を志すきっかけになったとまでは言えないが、地元で考古学を続けるきっかけとなった遺跡である。

母親に聞いた話だが、私の親戚にも三殿台遺跡の発掘調査に参加したことがある人がいたという。その方は既に亡くなっているそうだが、当時の話を聞いてみたかったと思う。どういうきっかけで調査に参加したのか、楽しかったことや辛かったことはなんだったのか、とても気になって仕方がない。

主要参考文献：

田中義昭2019「開発と考古学 市ヶ尾横穴群・三殿台遺跡・稲荷前古墳群の時代」新泉社
和島誠一1965「三殿台」横浜市教育委員会
横浜市歴史博物館・(財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター・横浜市三殿台考古館
2011「大昔のムラを掘る 三殿台遺跡発掘50年」横浜市歴史博物館

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは佐藤 拓さんです。

考古学者の書棚

『諏訪史 第一巻』刊行100年一次の100年へ

諏訪考古学研究会(2025)

児玉 利一

大正13年(1924)年12月に刊行された『諏訪史』第一巻(以降、『諏訪史』と省略)は、長野県諏訪郡の歴史書(地方史・郡史)の一冊目として原始古代について考古資料を中心に据えてまとめられた。地方史の金字塔とも称される同書の刊行から100年の節目に刊行されたのが、『諏訪史第一巻』刊行100年一次の100年へ』である(以降、本書と省略)。諏訪考古学研究会の会員17名が執筆したもので、この100年の調査・研究の進展や変化を時代や遺物に分けて比較・検討したり、発掘等により膨大に増えた遺跡・遺物の紹介、『諏訪史』掲載遺物の現在の所在についてまとめたものである。筆者も本書の刊行に携わった一人であり、ここで紹介するのもしささかおかしかもしれないが、いち読者として感想を記したい。

『諏訪史』といえば著者が鳥居龍蔵であることが有名であり、そこに目が行くことで終わることもあるかもしれない。しかし、そもそも鳥居を迎え入れることになったのには、長い諏訪郡の教育界の取り組みがあったことによるのであった。そのような経緯や経過を本書のなかで裏話のように教えてくれるのが「第1部『諏訪史第一巻』誕生の背景と意義」である。執筆した三上徹也氏による執拗な追跡の賜物である。三上氏の文章から抜粋して紹介したい。

発行者である信濃教育会諏訪部会(現在の諏訪教育会)では、『諏訪史』以前にまずは諏訪郡の理科教育の発展のため、地質や土性の研究に着手した。その次には諏訪湖をメインとし、成果は上・下巻の大著『湖沼學上より見たる諏訪湖の研究』(田中阿歌磨著1918)を刊行。その次には、歴史ということで郡史編纂が教育会あるいは郡役所の事業として動き出す。全5巻による郡史編纂・刊行を目標に、地域の史資料を悉皆的に洗い出すこと。執筆・監修には中央の著名な学者にお願いし、一流の内容とすることなどを目指した。編纂主任の今井真樹をはじめとして多くの郷土史家(教師)が参画し、さらに教師以外の人々にも関わりが持てる場所として諏訪史談会を設立した。銀行勤めだった両角守一や運送業の瀧沢益作などは多くの遺物を蒐集し、また考古学の専門知識を持ちえた人物であったが、そのような存在と郡史編纂とが関わりがもてたのは、史談会があったこともひとつの要因であった。両角はその後に森本六爾と交流し東京考古学会に加わる。ひと世代下の藤森栄一も旧制諏訪中学生のうちに史談会に参加し、両角を介して森本と出会ったことで、その後の将来に大きな影響を与えることになった。また、終戦後の昭和25年に諏訪清陵高校生だった戸沢充則は、藤森の助言を得て瀧沢を訪ね、氏の収集遺物を譲り受けたことなどもあり専門的に考古学の道に進んでいった。郡史編纂事業開始時は旧制諏訪中学生であった八幡一郎は東京帝国大学に進学し鳥居門下生として事業に深くかかわり、さらには先史時代部分の原稿をも書いた。

『諏訪史』の印刷・発売所である古今書院の橋本福松は、上伊那郡生まれで教師となって諏訪郡に赴任していたが、諏訪教育会が郡史の前に取り組んでいた自然・地理的環境の調査の

一環として、諏訪湖の水深測量を行っていた際に湖底の曽根遺跡を知ることとなり、坪井正五郎らの本格的調査に発展したそのきっかけをつくった。橋本はその後1922年に東京で出版社古今書院を創業し、『諏訪史』の印刷・出版を担うことになった。古今書院は地理学専門書などの出版社で現在も続いている。



宮坂光次は上諏訪に生まれ、尋常小学校では両角守一と同級生という人物で、写真撮影を担ったり、東京帝国大学入学後は鳥居の弟子として同期入学の八幡らとともに資料調査でたびたび帰郷している。刊行後の1926年には千葉県姥山貝塚において竪穴住居跡の完掘を成し遂げた人物であることは、知る人は少ないのではないかと。まさに埋もれた「郷土の偉人」である(筆者が知らなっただけかもしれない)。鳥居の東京帝国大学の同僚で西洋史が専門の今井登志喜の生家は、編纂主任の今井真樹と同じ村内にあり、さまざまな縁を繋いで鳥居にたどりついた。

本書は『諏訪史』を振り返りながら、諏訪地域の考古学史・考古学研究の今日的な意義にふれ評価を行っているが、個人的にはここまで記したような人々の人物史・相関関係がとても興味深いものであった。そして、諏訪からこれほどまでに多くの考古学研究者が生まれていることへの驚きである。これは諏訪が自然に恵まれ、遺跡に恵まれた中に考古学に興味関心を持つ人々が生まれ、郡史編纂・『諏訪史』刊行という大事業の時流に乗って一気に加速したのだろう。「教育県」とも呼ばれた長野県にあって、『諏訪史』はその結晶であり到達点でもあるということが、本書で改めて証明されたと思う。

筆者はこれまで学史について好んで調べることはなかったが、諏訪という身近なところからどんどんと派生して広がって、日本考古学史の一端を知った気がして、引き込まれた。そして、さらに調べたくなった。

アルカ通信 No.269

発行日	2026年2月1日
企画	角張淳一(故人)
発行	考古学研究所(株)アルカ 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15 TEL: 0267-25-0299 aruka@aruka.co.jp URL: http://www.aruka.co.jp